
無頼装甲ツキカゲ

大迫力

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無頼装甲ツキカゲ

【Nコード】

N4455E

【作者名】

大迫力

【あらすじ】

時は天保の頃。関八州では、ヤクザの横行による治安悪化の闇に隠れて跳梁する、異形の怪物達の姿があった。そして、白銀の装甲を纏って怪物と戦う者の姿も…怪物を倒す白銀の剣士、その名はツキカゲ！今、無法地帯の関八州に、正義の空っ風が吹き抜ける…

プロローグ(前書き)

ブローグ

ブローグ

七月一日

昨夜子刻 赤城山方ニ流星見工山腹ニ落ちタリ
轟音凄マシク木々倒ルル事甚ダシ

是流星ニ非ス 隕石也ト思ス

今朝 村衆総出テ山狩リス 然レトモ隕石見エス

只鉄屑塊有ル已ニテ甚タ面妖也

三月ノ大坂兵乱未タ収マラス 先頃モ越後ニテ乱在リシニ 是乱
レシ世ヘノ天罰也乎

上野国駒井村庄屋・木村平兵衛の日記)

天保八年)より抜粋

巻之一 月影の戦士、桑畑に立つ

(1)

星一つない、雲に覆われた暗い夜だった。上野国・境野宿に近い、林の中の一本道を、一人の男が提灯片手に上機嫌で歩いていった。

つい先程、林の中の神社に設けられた賭場で大勝ちしていたのだ。男の進む先には、桑畑の中を開けた宿場の明かりが小さく見える。

「へへっ、今夜はこの金ではあつと……」

男がそうつぶやいた時だった。

突然、男の背中に何か突き刺さった。男は最初、何が起こったのか分からずキョトンとなったが、すぐ激痛に顔を歪ませた。顔だけを後ろに向ける。十間程後ろに立っている人影の、右手の指先からイカの足のようなものが伸び、それが背中に刺さっていた。

手に持っていた提灯が落ち、地面の上で燃え上がる。その火に照らされた人影の顔に、男は見覚えがあった。

「お、おめえは……」

賭場で用心棒をしていた浪人だった。

(あいつら、はめやがったな！)

が、その男の叫びは声にならなかった。背中に刺さった浪人の指から、男の体液が吸い出されていたのだ。あつという間に、男はミイラになって絶命し、道に倒れた。

浪人は男の亡骸に近づくと、懐から財布を抜き取り、自分の着物の袖にしまった。そして、男の亡骸をじっと見詰めると、両目から赤い光線を放った。

亡骸は青い炎に包まれると、数秒で灰になり、跡形もなく消えた。

浪人は不敵な笑みを浮かべると、宿場へ向かって歩いていった。

(2)

「神隠し、ですか？」

江戸。公事方評定所の一室で、新たに“八州廻り”に任命された同心の、武田左門は言った。

「そう、それも境野宿で集中してな。」

そう答えたのは八州廻りのトップ、評定所留役の松平与兵衛である。

「面妖なことだが、五年前、赤城山に隕石が落ちて以来、このての事件が関八州のいたる所でおきておる。」

「人間業とは思えないような…ですか、やはり関係があるか？」

「はつきりとは言えぬが。百姓共は、妖怪の類が引き起こしている等と埒もないことを…それに、ここ最近妙な噂が聞こえてくる。」

「噂？」

「こういった奇妙な事件の起こる所には、白銀の鎧を纏った剣士が現れ、化け物を倒しておる、と。その者が現れた後には、決して事件は起こらない、とな。」

「白銀の剣士…」

「それも含め、お主に真相を突き止めて欲しいのだ。たまたま江戸に居ったのがそなたであつたから頼むのだが、どうだ？」

左門は間髪入れずに平伏し、ヤル気満々な感じで言った。

「はっ、慎んでお受けいたします。」

「頼むぞ。そちの八州廻りとしての初仕事じゃ！」

“八州廻り”。正式名を“かんとうくりしまりやく関東取締出役”といい、徳川幕府が設けた広域捜査官である。

この頃の関東地方、いわゆる関八州は幕府の直轄する天領・大名領の藩・寺社領が複雑に入り組んで存在しており、治安の悪化とともに、そうした領地の垣根を越えて犯罪の取り締まりを行う組織が必要とされた。

そうしてできたのが八州廻りであり、言わば江戸のFBIである。常時8人の同心がそれぞれ別個に関八州の村々を巡回し、犯罪の取り締りにあたっていた。

かくして、左門は配下の岡っ引きの半治と共に、上州境野宿へ向かって旅立った。

(3)

道案内と呼ばれる地元の岡っ引き・辰造に案内され、境野宿に続く街道を左門と半治が歩いていった。

道すがら、辰造から事件のあらましは聞いていた。三月程前から、宿場の界限で旅人や町の者、近郷の百姓、男女に関係なく、様々な人が姿を消していた。唯一の共通点は、皆夜に行方がわからなくなつたことであつた。

「そいつあ妙だな。」

左門は唸るように言った。

「しかし旦那、初仕事がこんな奇妙キテレツな事件の改め方じゃ、どうも調子が狂っちゃいますね。」

半治が言った。今年で二十五歳になる左門より、二丁三つ程年下だが頼りになる男だつた。

「何言つてんだ。どんな事件でも、それを解決して泰平を守るのが俺等の役目つてえもんよ。いやあ腕が鳴るぜい！」

ハツラツとした口調で、指をポキポキ鳴らしながら、左門は言った。この男、一事が万事この調子である。

一行が宿場に着いたのは夕方であつた。

宿屋で荷をとくと、三人は町の酒場に向かつた。酒場には様々な人間が集まり、情報の交換が行われる。ゆえに、何か事件の手がかりが掴めるかも知れなかつたのだ。

案の定、酒場は賑わつていた。左門は客達を見回したが、特に変わったところは見られない。運ばれてきた酒を飲もうと左門がトツクリに手を伸ばしたその時…

荒々しく戸が開いて、着流し姿に長脇差しを差した、人相の悪い三人組の男が入ってきた。

「ありやあ、この宿場を仕切ってる儀助の子分で、熊吉と文平、それに丑松でさあ。」

辰造が小声で左門に言った。要はチンピラである。

「おい親父い、酒だ酒！」

文平が叫び、熊吉がカウンターに座っていた客二人を突き飛ばした。

「なつ何するんさ！」

「邪魔なんだよ！」

熊吉はそう言つと、起き上がろうとする客の一人の顔を蹴りつけた。鼻血を出して客が土間に転がる。

熊吉は、二人の隣の席に座っていた男に近寄る。

「あいつら……」

刀を持って立ち上がるうとする左門を、半治は辛うじて押し留めると小声で言った。

「旦那、ちよつと待つてくだせえ。下手に動いちゃあいけませんぜ！」

左門は渋々座り、様子を見守った。

(4)

男は手甲脚絆姿で、椅子の背もたれに外套を掛け、傍らには長脇差と三度笠を立て掛けていた。典型的な渡世人である。

鬚は結わらず、髪を後ろで束ねていた。女のような整った顔で、切れ長の鋭い目をしていた。

「おい、どかねえか！」

凄む熊吉を気にも留めず、男は酒を飲み続けながらぼそりと言った。

「つたく、夜だつてのに雀がチンチンうるせえな……」

「んだとテメエ！」

長脇差しに手をかけた丑松に向かって、男は言った。

「ここじゃ周りに迷惑だ、表へ出よう。」

「へっ、やる気になつたんかい。」

丑松は言つと、男と熊吉、文平を伴つて店を出た。店先で男と三人は対峙した。辺りに人だかりができる。

「やつちまえーっ！」

三人は長脇差しを抜いて一斉に斬りかかつてきた。だが男は悠然と構え、長脇差しを抜くと目にも止まらぬ速さで三人の間をすり抜ける。

次の瞬間、三人の着物の帯が切れ、前がはだけた。

「…っ テメエ！」

三人は激昂してさらに斬りかかろうとしたのだが…

「キヤー!!!」

野次馬のなかにいた女達が悲鳴をあげて手で顔を覆った。帯だけでなく、ふんどしの紐も切れ、三人の“男のシンボル”が露になっていた。気付いた三人は慌てて隠す。

「次は切り落とす…」

切っ先を突き付けられ、三人は尻尾を巻いて逃げていった。男は長脇差しを鞘に収めると、店内に戻つて荷物を背負うと外套を羽織つた。

「とんだ迷惑をかけたな、すまねえ。」

そう言つと男は、店主に金を払つて店を出ようとした。

「ちよつと待ちな。お前、なかなかやるじゃねえか。」

左門が男に声をかけた。

「見苦しいものを見せちまいました。」

男は謙遜するように言つた。背はそれほど高くない。歳は左門より若干上に見える。

「ん…なんだいそりゃ？」

左門は男の振り分け荷物の紐にくくりつけられていた球に気付いて尋ねた。

一見すると大筒の弾のように見えるが、黒い球に銀色の金属板をツギハギしていた。男は慌てて外套でそれを隠す。

「まあいいや、お前名前は？」

左門が聞いた。

「…捨松。」

男はそう言うと、足早に店を出ていった。

(5)

翌日から、左門と半治は聴き込みを始めた。数日間行った結果、消えた者達は皆、博奕好きであることがわかった。

また、町の遊び人・寅太の証言から、皆失踪当日は賭場に来ていて大勝ちしていたことが明らかになった。

「その賭場を仕切ってるのが、例の儀助でさあ。…そう言えば、ちようど神隠しが起こるようになってからだったなあ。儀助の羽振りがよくなったのは。」

辰造が言った。儀助一家は、元は貧乏なヤクザだったが、ここ最近急に金回りがよくなり、町で幅を利かせるようになった、と。先日 of 三人もその現れであった。

「くせえ…何かありますねえ、こいつあ。」

半治が言った。

「何かあるつて、何が？」

左門が聞き返す。

「例えば、勝った客を帰り道で待ち伏せしてバツサリと…そんな金を取り返せば、それにイカサマでもしてわざとその客を勝たせた後なら、ボロ儲けですぜ。」

「なるほど。…だが証拠がないぜ、死体もみつからねえんだからな。」

左門の言葉に、一同が黙り込む。

「…だが、この件に儀助が絡んでるのは間違いなさそうだぜ。どうだ、今夜あたり賭場に潜入するってのは？」

再び口を開いた左門の提案に、半治と辰造は頷いた。

(6)

同じ頃、町外れの桑畑の中に建つ儀助の屋敷では、一家全員(13人)が集まつての集会が開かれていた。

「どうやら八州廻りが、例の事を色々と嗅ぎ回ってるらしい……」
儀助が言った。豪華な着物を着ているが、貧相な顔付きでヤクザというよりも農家の爺さんといった風貌である。

「この分じゃ、俺等が客を殺して金を取り返してるのがばれるのも時間の問題だ。」

「待て、死体は絶対に見つからないように処分してるんだ。大丈夫だよ。」

そう言ったのは、賭場の用心棒として雇われている、監物けんもつという浪人だった。

「わかつておりますよ。あくまで用心の為でさあ。……いいか、八州廻りがいる間は、賭場を閉める。」

儀助の言葉に、監物を除く全員が頷いた。

「ちよつと待て、俺の仕事はどうなるんだ!？」

「ご心配なく。先生が今まで稼いで下さった分がございますから、当分はゆつくりしておくんなせえ。」

「ふざけるな!金なんて問題じゃねえ!」

啞然となる周囲をよそに、監物は猛烈な勢いで儀助に掴みかかった。

「賭場を閉めるなんて許さねえぞ、取消せ!」

監物は叫びながら、儀助の顔を狂ったように何発も殴った。

「何しやがる、このサンピンがあ!」

子分達が数人掛かりで監物を引き剥がした。そして監物は袋叩きにされて完全にのびてしまった。

「親分、大丈夫ですかい?」

「なんなのさ一体……いきなりぶん殴りやがって、ぶん縛って土蔵に放り込んでけ!」

鼻血を拭きながら儀助は言った。グッタリした監物が、畳の上を

引き摺られて行く。

事の一部始終を、捨松は庭の木の上から眺めていた。母屋に一家全員が集まっていたため見張りもおらず、気づかれることなく忍び込むことができたのだ。

そして捨松の肩の上には、あの銀色の球が浮かんでいた。

「やつぱりアイツか？」

捨松は球に語りかけた。

「ああ間違いない、エサが喰えなくなるんで焦っていやがった。

そのうち尻尾出さず、ありゃあ。」

その声は球から聞こえてくる。

捨松は球と会話をしていた。

(7)

「しかし、儀助ってやつもなかなか頭を使ってくるな。まいったぜ。」

宿の一室で頭を抱えながら、左門は言った。

潜入しようとしたその日に賭場は閉鎖され、儀助一家は沈黙を保っている。幸い左門達が来てから神隠しは起こっていないが、何も無いまま時がすぎ、これで五日目の夜になる。さながら、持久戦の様相を呈してきた。

「……おい辰造、儀助の家に案内してくれねえか？」

突然の左門の申し入れに、二人は驚いた。

「へえ、大丈夫ですけど……」

「旦那あ、早まった事はやめて下せえ！今は動かねえ方が……」

「もうこれ以上待てるか！江戸っ子は気が短えんだ、儀助の家に乗り込んで直に問い質してやる。」

半治の制止を振り切って左門は立ち上がり、刀と十手を帯に差し込んだ。

その頃。儀助の屋敷の土蔵の中には、体を縛られて床に転がっている監物の姿があった。床の上には朝に出された食事が、口を付けられていない状態で置かれている。

「腹減った……」

監物がそう呟いた時、扉が開いて、食事が乗った盆を持った若い衆が入って来た。

「やれやれ、また食ってねえのか？ 5日間飲まず食わずじゃねえか。」

「腹減った……」

「だったら食え！ 手を使わなくても食えるように、こっちはわざわざ握り飯にしてやってるんだぞ！」

「腹減ったーっ！！」

突然監物は叫ぶと、全身に残った力を振り絞り、縄を振りほどいて立ち上がった。若い衆は驚いて後ずさる。

監物は若い衆を見て舌舐めずりをし、人差し指を突き出した。次の瞬間、指は勢いよく伸び、若い衆の首筋に突き刺さる。ほんの数秒で、若い衆はミイラになって絶命し、床に倒れた。

「足りない…まだ…足りない…」

監物は土蔵の外に出ると、ゆっくりとした足取りで母屋へむかっ

(8)

空には満月が昇り、とても明るい夜だった。儀助の屋敷に続く桑畑の中の道を、辰造を先頭に左門と半治が歩いていた。

「助けてくれー！！」

突然叫び声が聞こえ、一同は声のした方を向いた。前方の、儀助の屋敷の方向から五、六人の男達が走って来る。

「儀助達だ…」

辰造が言った。熊吉や文平、丑松もいる。何かから逃げているらしい。よく見ると、後ろから浪人風の男が人差し指を突き出して、

ゆつくりと歩いて来るのが見えた。

「何だ何だ、おい。」

そう呟いた左門は、次の瞬間我が目を疑った。

男の人差し指が勢いよく伸び、逃げ遅れた子分の一人の背中に突き刺さったのだ。子分は瞬時に体液を吸い取られ、ミイラになって倒れる。

「ええええっ!?!」

訳が分からず、立ち尽くす三人を盾にするように、儀助達が後ろに隠れた。

「助けてくれ!」

「あいつ、あんたの所の用心棒じゃないんかい?」

辰造が儀助に尋ねた。

「そうだけど、狂いやがったのさ!」

監物はニヤニヤ笑いながら近づいて来る。

「お侍様、その腰の刀でやっちまって下さいよ。」

儀助が左門を盾にしながら懇願した。

「お前等も差してるじゃねーか!」

左門がツツコミを入れた時、監物の顔が赤いイボに覆われ、口がヒルのように変形し、両目が不気味な光を放った。監物は異形の怪物に変容していた。

「ああーっ!?!」

左門と半治が悲鳴をあげた時、監物の指が襲い掛かってきた。絶
対絶命……

その時だった。

突然、横から光線がほとばしり、監物の指を切断した。

監物が絶叫し、一同は光線の発射された方向を見た。

そこには、白銀の鎧のような装甲を纏った人影が、桑畑の中、月を背にして立っていた。

月の光に照らされ、白銀の西洋甲冑のような装甲と、顔を含めた頭部全体を覆う兜に付いた、三日月状の金色の前立てが光り輝いて

いる。

「ツキカゲ、参上！」

装甲を纏った人影は高らかに叫んだ。

(9)

「こい、月光丸！」

右手を空にかざして、ツキカゲは叫ぶと、頭上の空に穴が空いた。ちょうど左門達からは月に穴が空いたように見えた。

そして、穴から剣が飛び出して来てツキカゲの右手に収まり、穴は消える。

「あれは……」

剣を振りかざして監物に向かって行くツキカゲの姿を見て左門は言った。

「白銀の……剣士。」

監物の注意は完全にツキカゲへ向いていた。

「旦那、この隙に早く！」

半治にうながされ、左門は渋々従い、一同はその場を逃げ出した。

監物は手の指を全て伸ばして、ツキカゲの装甲を貫こうと攻撃してきた。が、立ち並ぶ桑の木に阻まれ、思うように届かない。

ツキカゲは監物に走りよりながら桑の木ごと、指を月光丸で切り刻んでいく。痛みに監物が絶叫する。

烟を抜けて道に出たツキカゲは、月光丸を監物に突き付けて言った。

「囚人番号80322515・ヴァンプ星人・監物。他星系における高次知的生命体無差別殺害の容疑……」

ツキカゲが言いかけた時、監物は獣のような叫びをあげ、目から光線を発射した。

間一髪でそれをよけたツキカゲは、監物を見据えた。

「チッ、理性を失ってやがる！」

そう呟くとツキカゲは、地面を蹴って勢いよく飛び上がり、叫んだ。

「反重力波！」

足元の空間が歪み、ツキカゲの体は空中に静止した。驚いた監物はツキカゲを見上げる。

「そこだ、円月殺光！」

ツキカゲは左手の手のひらを突き出す。すると、手のひらから光線が放たれて監物の右目を潰した。

「ゲアアアアアアーツ！！！」

監物が右目を押さえて叫ぶ。ツキカゲは地面に降り立つと、監物に向かつてゆつくりと歩み寄った。

「…及び、護送船内での反乱・脱走の罪により、銀河を貫く法理に従い、貴様を処刑する！」

のたうち回る監物に言い放つと、ツキカゲは月光丸を天に掲げた。月の光を浴びた刀身が、青白い光を放つ。

「月光・満月斬り！」

そう叫ぶと同時に、ツキカゲは月光丸を振り降ろし、監物を袈裟懸けに斬った。次の瞬間、監物は光の輪に包まれ、大爆発を起こした。

全てが終わり、ツキカゲの全身を覆っていた装甲は光の粒子になって身体から離れ、銀色の球になっていく。そして球は、装着者である捨松の手の中に収まった。

桑畑の中に火柱が上がる。その火柱を、捨松は黙って見詰めた。

(10)

「三月前に、あの浪人がこの話を持ちかけて来たのさ。死体は絶対に見付からないようにする、その上金は要らねえなんて言うから任せたんだが、まさかこんな事だったなんて…」

左門に問い詰められて儀助は、賭場で儲けた客を帰り道で監物に

闇討ちさせ、金を奪わせていたことを白状していた。

「けど、お前等の悪事に変わりにはねえ！」

左門はそういうと、懐から八州廻りの身分を示す“御判物”と呼ばれる書状を取りだし、水戸黄門の印籠のように掲げた。

「その方等の悪逆非道な行い、許しがたし。関東取締出役・武田左門、儀助一家に江戸送りを申し付ける。後日、評定所のお裁きを受けーいー！」

左門は高らかに言い放った。儀助一家は地面にひれ伏す。

「これにて一件落着！」

翌日、左門と半治は辰造に別れを告げ、境野宿を後にした。儀助一家は、宿場の住民の手で江戸へ送られることになった。

「しかし旦那、結局あの化け物はツキカゲがやつつけたんですかねえ？」

峠の入り口の茶屋で半治は言った。その後、儀助の屋敷の方へ戻ってみるとツキカゲの姿はなく、監物と思しき物体の燃えカスが残っていただけだったのだ。

「多分な…まあ奴が敵でも味方でも、次に会ったら必ず正体を突き止めてやるぜ！」

(そう都合良く会えるのかよ…?)

息巻く左門を見詰めつつ、団子を頬張りながら半治は思った。左門は相変わらずである。

そんな二人の様子を、捨松は峠道の上から見詰めていた。

「何だか、あの二人に美味しい所を持っていかれたみてえだな。」

捨松は、肩から下げた振り分け荷物の紐にくくり付けた球に語りかける。

「仕方ねえさ。俺達のやってることは、おおっぴらに出来ねえからな……」

球が言った。それを聞いて捨松は微笑んで前を向いた。

「そうだな…よし、行こうぜツキカゲ！」

「おう、相棒！」

球が答えるのを聞き、捨松は力強く歩き出した。

卷之二 無情の剣、月夜に舞う

(1)

草木も眠る丑三つ時。上州・伊勢崎に程近い町。

路地裏の狭い道を、男は必死に走っていた。歳はまだ若く、顔を手拭いで覆い隠している。そして男の肩の上には、御布施と書かれた千両箱が担がれていた。

(うまくいったぜ、後はこの金を……)

男が心の中でそう呟いた瞬間、視界に人影が入った。思わず足が止まる。

そこには、人影が二つあった。一人は長髪でスラリと背が高く、神主が着るような真っ白い狩衣姿であった。整った顔からは、化粧のせいかわいらしい色気が漂っている。男か女か、区別がつかない。その脇に控えるように、ツルツパゲ頭に薄黄色の柔道着のような服を着た小柄な男が立っていた。そして男は周りを見回すと、ツルツパゲと同じ服装の男女が10人程、自分を取り囲んでいることに気づいた。

「…ただけませんね、神聖なる御布施を盗み出すとは。」

長髪は容姿のわりに野太い声で、男であることが分かる。

「なっ、何をいいやがる。元々はお前らが騙し取った…」

男が言い終わらないうちに、長髪は手のひらを男の胸に向ける。

すると道端の石ころが長髪の手の上に浮かび上がり、次の瞬間には物凄い速さで飛び、男の胸を鉄砲玉のように突き破った。

男は声を上げることもできず、その場に倒れ、息絶えた。地面に赤い水溜りができる。

「さて、こやつのが骸はどういたしましょうか？」

長髪がつぶやくと、ツルツパゲが応えた。

「ここは見せしめの為に、このまま放置しておくべきかと…さす

れば、町の皆が御前の力の強大さを思い知りましょう。」

「なるほど。禍鬼まがきよ、そなたの言うとおりにいたしましょう。」

長髪はそういうと、懐から扇子を取り出して広げ、口元を隠して甲高い笑い声を上げる。

不気味な笑いが、闇の中にこだました。

(2)

「…石が心の臓を突き破ってた、か。」

伊勢崎に向かう道中で、“八州廻り”同心の武田左門はつぶやいた。

「とてもじゃございませんが、ありやあ人間業とは思えねえ。」
そう言ったのは、道案内の猪之助である。

「それに、その殺しの前にも色々とありましてね…」

猪之助によれば、伊勢崎近辺ではこのところ、奇妙な事件が続発していた。

突然、空から大岩が降ってきて商家が潰れる。ある百姓の畑の桑の木だけが、一晩で根こそぎ引っこ抜かれる。貯水池の水が、突然逆流して干上がってしまう等々。

そして3日前、石で胸を撃ち抜かれた男の死体が見つかったのだ。

知らせを聞いた左門と半治が現場に向かうことになり、今はその道中でなのであった。

一連の、人間業とは思えない事件。

左門の脳裏に、境野宿で遭遇した怪物の姿がよぎつる。

「旦那、まさかこれも化け物の仕業なんじゃあ…」

左門配下の岡っ引き、半治が小声でいった。

「多分な…」

左門も小声で答える。

「それで、その事件の起こった所には、必ずやって来る奴等がいましてね。」

猪之助が勿体ぶつた様子で言った。

「何だそりゃ？詳しく教えてくんねえか？」

左門の問いかけに、猪之助は口を開いた。

「伊出羅教いでらぎょうとかいう宗教の奴等なんです、その教祖けんさいの幻斎げんさいが、これは自分が下した天罰だ、とかぬかしやがるんです。それに例の、心の臓を撃ち抜かれた三吉さんきちって男の側に、伊出羅教の千両箱せんりょうばこが落ちていやしてね、案の定幻斎げんさい達が来て、御布施盗んだ天罰だ、とか言ってたんですが、なにせ確証がねえんで連中をしょっ引くわけにもいかねえ。代官所のお役人様方も、気味悪がって手出しできねえんです。あ……」

と、やや状況説明的な長台詞を、猪之助は一気に言いきった。

「旦那、ひよつとしてその幻斎げんさいってやつが……」

「恐らくあの化け物の類だろうよ。」

半治の言葉に、左門は押し殺した声で答える。だがその目は爛々と輝いていた。

(3)

同じ頃、事件のあった街に入る、一人の男の姿があった。

男は手甲脚絆姿に、大きな三度笠を被って薄汚れた道中合羽を羽織り、腰には長脇差、いわゆる長ドスを差した典型的な渡世人のいでたちである。鬚は結わずに、髪を後ろの方で無造作に束ねていた。そして肩から下げた振り分け荷物の紐に、鞆ほどの大きさの金属の球を括り付けている。

「捨松すけまつう、この街か？お前のダチがいるっていうのは。」

その声は、紐にくくりつけられた球から聞こえてくる。

「ああ、二年前に親分にワラジを履かせられてから、今じゃここの生系問屋で手代をしてるって話さ。」

男…捨松は懐かしそうに言った。

「ほーう、感心なことだな。」

「なあツキカゲ、どうやらこの近辺で妙な事件が起こってるらしい

が、やっぱり奴らの仕業か？」

捨松は球・・・ツキカゲに尋ねた。

「ああ、恐らくな。」

ツキカゲが少し間を置いて言う。その時だった。

遠くから、デ・デン・デンという団扇太鼓の音が聞こえてきた。

音のした方を見ると、道の前方から薄黄色の柔道着のような服を着た集団が歩いてくるのが見える。

先頭に立つのは、白い狩衣姿に長髪の間人だった。

「だぁーい、じょぉーぶ、だぁーっ」

長髪がそう言って団扇太鼓を叩くと、あとに続く者達も同じ文句を続け、更に長髪が、

「ヴェッ！ヴォエッ！ウエッ！」

と叫ぶと、皆同じように叫んだ。

「何だい、ありやあ？」

「新手的宗教だろ……」

捨松は冷静な口調で言った。

やがて彼らは、捨松とツキカゲの横を軽く会釈しながら通りすぎていく。

「おい捨松、どうやらあの中にいるようだぜ・・・変な気配がした。」

ツキカゲは、冷静な口調で捨松に言った。

捨松とツキカゲは、さらに街中へと入る。すると二人（？）の目に、地震で潰れたかのような商家の残骸が飛び込んできた。

「ひでえ、どうしたんだ、こりやあ？」

ツキカゲが素っ頓狂な声をあげ、捨松は敷地内に足を踏み入れた。あちこちに大岩が転がり、屋敷の屋根に穴が空き、土蔵の壁は粉々に砕けてわずかに形をとどめているに過ぎなかった。

「岩が降ってきたのか……？」

捨松がそうつぶやいた時だった。

「何かここに御用でも？」

という声が聞こえた。声のする方を見ると、そこに17、8歳位の娘が立っていた。

「ああ、いや、用って程のもんでも…そうだ、生糸問屋の渥美屋ってえのはどこにあるかご存知で？そこで手代をやってる三吉って奴に会いにきたんでござんすが…」

「えっ！？三吉さんに…」

娘はびっくりしたように言った。

「ご存知で？」

捨松が尋ねると、娘は動揺した様子で足元に落ちている、大きな板切れを立てて見せた。板切れは店の看板で、渥美屋と大きく書かれている。

「三吉さんは…死にました。」

娘は力なく言った。

(4)

娘の名前はミツと言い、父は渥美屋の主人・清兵衛であった。

「お父っつぁんの出す御布施が少ない、修行が足りないことへの天罰だ、って幻斎が言いました。そしたら突然空から大岩が降って来てお店が潰れたんですよ。奉公人達もみんな出て行って、唯一残った三吉さんは、お金を取り戻して店を再建するんだって言って…」

ミツが言った。ここは町外れの川原に建つ掘っ立て小屋の中である。今は清兵衛親子の住まいとなっていた。

そして、奥のほうには棺桶が置かれ、線香がたかかっている。

三吉の棺だった。捨松は無言でそれを見つめ続けている。

「私の修行が足りなかったせいですよ…しかし三吉の奴も罰当たりなことをしおって！」

「お父っつぁん、もういい加減にしてよ！三吉さんはお父っつぁんの為にお金を取り返そうとしたのよ…大体こうなったのも、

お父つつあんがあんな宗教にのめり込んで、商売傾けさせたせいじゃないのさ！」

ミツは泣きながら、清兵衛食って掛かった。

「何を言う！そもそもわしは店を救うために……」

清兵衛が負けじと言い返そうとしたその時、捨松は大きな咳払いをした。2人が静まる。

「大体のことは分かりやした……あつしはこれで。」

そういうと、捨松は荷物を担いで小屋を出た。ミツと清兵衛は呆然としながら送り出した。

「どうすんだ捨松。」

「ここは……俺に任せてくれねえか。」

そうツキカゲに言うのと、捨松は小屋の方を振り返った。

「だあーい、じょおーぶ、だあーっ……ヴえっ、ヴおえっ、ウエえっ！」

清兵衛の唱えるあの奇妙なお題目が、団扇太鼓の音とともに、河原に虚しく響いていた。

2日後の夜、半治は町中にある伊出羅教の道場にいた。信者達が着る薄黄色の道着を着て、例のお題目を唱えている。情報収集の為、教団に潜入していたのだ。

やがて、祭壇の方へ教祖の幻斎を筆頭に、幹部達が次々に上がった。場内にいた信者達が沈黙する。神主の出で立ちの幻斎は、長髪で、女のような顔をした男だった。

「皆さん、今日も励んでおられますね。では今宵も、修行の前に御前様からありがたい御言葉をいただきましょう。御前、お願いいたします。」

ツルツパゲ頭の、禍鬼という幻斎の腰巾着のような男が言った。

禍鬼の言葉を受けて、幻斎は軽く咳払いをすると口を開いた。

「毛深い人は……優しい！」

場内に静寂が訪れる。

「…承りました。」

禍鬼がそう言つて幻斎に頭を下げると、信者達は一齐に床にひれ伏し、

「承りました。」と続けた。

半治は必死に笑いをこらえる。

「ではこれより、皆さんの現世でのケガレを、御布施として御前に納めていただきます。多ければ多い程、皆さんの魂は浄化されるのです。」

禍鬼が言つと、幻斎と幹部達は祭壇を降り、信者を一人一人回つて金を回収して行く。すると、幻斎の足が一人の男の前で止まった。その男の顔に、半治は見覚えがあった。

(あいつ、境野宿の渡世人。確か名は、捨松…)

(5)

「ほう、見馴れないお顔ですが、今日が初めてで？」

幻斎は涼しい笑顔で語りかけるが、捨松は無愛想に首を縦にふつた。

「それでは御布施を…」

禍鬼が言つと、捨松は懐から小銭を数枚、裸のまま差し出した。

「今は持ち合わせがこれしかねえんで…」

幻斎は眉をびくつかせたが、捨松の傍らに転がる銀色の球を見てギョツとしたような表情になった。

「珍しい球をお持ちで、何でしたらそれを…」

幻斎が手を伸ばそうとすると、捨松は球を手元に引き寄せて幻斎を睨み付けた。

「これ！御前に対して何ですか。」

禍鬼に叱りつけられ、捨松は幻斎から目を反らした。

「申し訳ございません。こいつだけは手離すわけにはいかねえんでさあ。」

「まあ…それは追々ということだ。」
気を取り直したように言うと、幻斎達は引き続き御布施を回収して回って祭壇へ戻った。

「さて皆さん、先日御布施を盗み出した不届き者のことはご存知でしょう。御前は大変嘆かれ、自ら天罰をお下しになりました。神仏に通じる御前の名を貶める者には、たちどころに神罰が下るのです。さあ皆さん、唱えましょう。唱えることで救われ、御前に限りなく近づくことができます！」

禍鬼の言葉で、幻斎は団扇太鼓を持つと例のごとく唱え出し、再び場内はお題目の大合唱となった。

(6)

三日後の昼、左門と猪之助は町の飯屋にいた。

「しかし、この町はどこ行っても寂れてんなあ。」

「幻斎達のせいですよ。半年前に奴等がきて人を集めだしてから、町の人間はみんな幻斎の所にいつちまったんでさあ。ったく、連中のせいでひどい目にあった奴が何人いるか……」

猪之助は茶碗に残った飯に汁をかけると、それを一気に掻き込んだ。

「無理もねえか。御陰参りなんてのが流行るくらいだからな。」

凶作と飢饉。一揆に打ちこわし。続発する外国船の接近。長引く不況と物価高。

つい五年前には、大坂で幕府の元役人・大塩平八郎が反乱を起こしている。

世の中が不安に覆われ、人々は何かをせずにはいられなかった。

この頃、伊勢神宮に集団でお参りに行く“御陰参り”と呼ばれる現象が爆発的なブームとなり、日本中の人々が伊勢神宮に殺到していた。

中には金を持たず、着の身着のままで行く者も多かったという。

これは蓄積した庶民の不満がエネルギーとなって爆発する一種の

火山のような社会現象であった。

そんな世相であるから、関東の片隅のこの町で、新興宗教が流行っても不思議ではない。

そう思いながら、左門は茶をすする。すると、表の方から例のお題目が聞こえてきた。

「疫病神がお出でなすつた。」

店の親爺が、そう言って奥に引っ込んだ。

お題目を上げる声はどんどん近付いて来て、ついに行列が店の前を通り過ぎる。その行列の中に、半治もいた。

お題目を唱えながら、半治は店内の左門に目配せをしていた。

一行が過ぎ去ってからノレンの下を見ると、一枚の紙切れが落ちていた。半治が落としていった物だった。

左門は素早くそれを拾うと、席に戻った。

「何か動きがあつたんで？」

紙をのぞきこみながら猪之助が訊いた。

「おう！」

左門は目を輝かせ、ニヤリとして答えた。

「おい猪之助、代官所に行つて捕り方を集めるように手配してくれ。うまくいけば今夜中に決着がつくぜ！」

その日の夕方。道場の建物の中にある一室に、捨松は座っていた。傍らには雑巾を置いてある。

ここは御布施を置いておく金庫のような場所で、高く詰まれた干両箱が壁を作っていた。それらは全て鎖で括られており、その鍵は禍鬼が持っている。盗み出すことはおろか、空けることさえ不可能だった。三吉が御布施を盗み出してから、警戒を強めた結果だった。

「おい捨松、お前任せでおけとか言つてたが、本当に大丈夫なのかよ？ 奴は俺達に気づいてるが知らぬフリしてやり過ごそうとしてるぜ。」

捨松の周りを飛びながら、ツキカゲは言った。

「ああ、わかつてる。だったら奴が一人ひとりになったところを狙えば……」

ツキカゲはゆっくりと床に下りると、強い口調で言った。

「そんな機会があるか？ 奴の傍には、常に大人数が張り付いてやがるんだぜ。」

「……」

考えが浮かばず、捨松は黙り込んだ。

すると、格子戸が開いて幹部の一人が顔を出した。

「これ、掃除に何時まで時間をかけておる。御前から皆にお話があるゆえ、早く参れ！」

幹部に急かされ、捨松はツキカゲを懐にしまつと道場へ向かった。

道場に集まつた信者達に向かい、禍鬼は口を開いた。

「今夜、新たに入られた方々に御前の力を知っていただくべく、修業を度々休む不屈き者に天罰を下しに参ります。御前に同道される方には機能のうちに話しをしております。よいですね、半治殿、捨松殿。」

半治と捨松は頷いた。

(7)

そしてその夜。満月ではあったが、雲が付きを覆い隠し、辺りは暗かった。

町外れの、川沿いに建つ屋敷の前へ、幻斎を筆頭に禍鬼と幹部達、そして捨松と半治という伊出羅教の面々が立っていた。

そこは茂左衛門という大地主の屋敷だった。その茂左衛門の御布施が、ここ最近滞っているので天罰を下そうということになったのだ。

「ではこれより、始めさせていただきます。」

幻斎はそう言うと、両腕を天に掲げた。

「ハアアーツ……！」

と幻斎が気合をかけると、河原の石が空中に舞い上がる。半治は驚愕して目を見張った。

舞い上げられた石は空中に静止する。大小合わせて百以上。と、その時だった。

突然、草むらが動いて河原から一人の侍が上がってきた。

「おお!? おう、おう、何やってんだお前ら?」

左門だった。

「あ! まさかお前ら、あの石つころでこの屋敷をぶっ壊そうって魂胆かい? だったら許しちやあ置けねえなあ!」

左門はわざとらしく大声を上げる。

「…ちつ、邪魔だあつ!」

幻斎は声を荒げて右手を左門へ向けた。

空中の石が物凄い速さで左門に向かって飛んでくる。

「おおつ?! おおーつ!」

左門は絶叫しながら、飛んでくる石礫をよける。だが、完全にはよけきれずに何発かは左門の身体に直撃した。

「痛つてえー!」

激痛に耐えきれず、左門は地面をのたうち回った。

「ふっ…どこの誰かは知らぬが愚かな奴。御前、止めを刺されませ!」

禍鬼がそう言った時だった。

「ふふふ…八八八八八八ハッ!」

突然、左門は不敵な笑いを上げるとゆっくり起き上がった。

「やりやがったな、テメエら…!」

左門は懐に手を入れると、八州廻りの身分を示す書き付け“御判物”を取り出して掲げた。

「そ、それは…」

一同が驚いて左門を見詰める。

「関東取締出役・武田左門である! 神妙にいたせ!」

「な、なんの罪だ? 我等がなにをした、証拠を出せ!」

動揺した幻斎が叫んだ。左門はさらにニヤリとして言った。

「八州廻りに危害を加える者は問答無用で召しとる、これ天下の御定法である。よって……」

左門は後ろの方へ目配せをする。

すると、猪之助に率いられた代官所の捕り方達、総勢20名が河原から上がってきた。

「八州廻りを傷付けた罪で、テメエら全員召しとる！」

「おのれ汚い真似を、全てお主のデツチ上げではないか！」

「うるせえ！おいオカマ野郎、テメエが化け物だつてことは分かつてるんだ、正体を現せ！」

左門が幻斎に向かって十手を突き付ける。

「神をも恐れぬ不埒者、天罰を下してやる。」

幻斎は左門に向かって右手を突き出した。左門と捕り方は一瞬身構えたが……

「……あれ？」

何も起こらなかった。左門達はおろか、伊出羅教の幹部達もキョトンとなつてしまった。

「ハアアーツ！」

幻斎は気合をかけるが、結局何も起こらない。

「なんで……？」

幻斎が脱力して座り込む。

そして沈黙がしばらく続いたが、

「召しとれーっ！！」

という左門の号令で、捕り方が幻斎達に殺到した。

(8)

多勢に無勢。幻斎達は召し取られた。

「そなた、八州廻りの犬であったのか……」

縄を打たれた幹部の一人が半治を見て憎々しげに言った。
半治は幻斎達を見回した。

「しかし、いきなり神通力が使えなくなるたあ、一体どういうことなんだ？」

左門が幻斎に尋ねた。

「知らぬ・・・なぜこうなったのか私にも・・・」

幻斎がそういつたときだった。

「旦那ーっ！」

半治が血相を変えて走ってきた。

「禍鬼が、あのハゲがいませんぜ！それに捨松とかいう渡世人も・・・」

左門はギョっとなった。

「まさか・・・おい猪之助、ここを頼むぜ。半治、ついて来い！」

左門はそういうと走り出した。半治もそれに続く。

「旦那、一体どこに行くんです？」

「道場だ！あのハゲ、きつと道場にもどつて金を持ち逃げする気だ、その前にとつちめる！」

「本当にいるんですかい？なにを根拠に？」

「武士の勘だよ！」

はたして左門の言葉通り、禍鬼は御布施を収めた部屋にいて、千両箱の金を袋の中に詰め込んでいた。一心不乱に。

（まったく、とんだ所でボロが出やがった・・・まあいい、この金を持ってまた別の土地で・・・）

そう思った時だった。

「なるほど・・・この惑星の人間に紛れて悪事を働く為に、宗教を隠れ蓑にしたか。自分は後ろに隠れて、後は騙し取った金を持ち逃げしようつてか？」

突然、後ろから聞こえたツキカゲの声に驚き、禍鬼は金を床に落とすとした。

後ろを振り向くと、格子戸の傍に捨松が立っていた。そして捨松

の肩の上にはツキカゲが浮かんでいる。

「キサマ・・・！」

「やっと1人になったな、これで心置きなく戦えるってもんだぜ！」

捨松が言い放った。

「ぬかせえ！」

禍鬼は右手を捨松に向けた。すると千両箱が次々と宙に浮き、捨松に向かって飛んで来る。

捨松は懸命にかわすが、数が多すぎた。次第に押されてくる。

「このヤローツ！」

宙に浮いていたツキカゲは、そう叫ぶと禍鬼に向かって突っ込んだ。ツキカゲは禍鬼の額に激突した。

千両箱が床に落ち、小判が散らばる。

禍鬼は額を押さえてかがみこんだ。抑えた額からは緑色の地が滴る。

禍鬼は激昂して捨松に掴みかかる。両者は取っ組み合った末に、道場の広間へ転がり出た。

「うおおおおーっ！」

緑色の血を流しながら、禍鬼は叫んだ。すると禍鬼の身体が光に包まれ、偉業の怪物へと姿を変えた。

全身がツルツルの、鎧のような皮膚に覆われ、顔はのっぺらぼうのように平たい。耳が筍のように尖がり、体色は緑一色であった。

「正体を現したな・・・よし、いくぜツキカゲ！」

捨松は叫んだ。

「おう、相棒！」

そう言うツキカゲは、捨松の頭上に静止した。

次の瞬間、ツキカゲの身体は微粒子のレベルまで一瞬で分解し、捨松の全身を覆った。

そして捨松の身体が眩い光に包まれた。

その光は、道場に向かつて走る左門と半治にもはつきりと見えた。

「旦那、あの光は……」

「急ぐぞ！」

2人は走るペースを上げた。

捨松を包んだ光が消えると、そこには白銀の鎧を纏った戦士が立っていた。

兜は顔を含めた頭部全体を覆い、目の部分は黒いギヤマンのような物で遮蔽されている。

一見すると西洋甲冑のようだが、兜に付いた三日月の前立てが金色の光を放ち、独特のフォルムを形作っていた。そして、彼は怪物に向かい、高らかに言い放った。

「ツキカゲ参上！」

(9)

「こい、月光丸！」 ツキカゲが叫ぶと、頭上の空間に穴が開いて月光丸が降りてくる。

月光丸がツキカゲの手に収まると、穴は消えた。

「旦那、あれは……」

「ツキカゲ……」

道場にたどり着いた2人の眼に飛び込んできたのは、怪物と対峙する白銀の剣士だった。

2人は戸の影に隠れて両者の対決に見入った。

「死ねええええええつ！」

禍鬼が叫ぶと、天井の梁が折れて直下のツキカゲへ落下する。ツキカゲは辛うじて逃れたが、梁は床に突き刺さって大穴を空けた。

直撃すれば命はなかつただろう。

さらに禍鬼は、床板を無理やり浮上させると、それを矢のようにツキカゲへ飛ばした。

飛んで来る床板を、ツキカゲは月光丸で切り刻んでいく。飛んできた床板は全て防がれた。

「念力か・・・奴の得意技だな。どうするよ捨松、近付けねえぜ。」

「いや・・・必ず隙はある！」

ツキカゲは左手の手のひらを突き出すと、円月殺光を発射する。

しかし、禍鬼は重力を歪めて壁を作ると、円月殺光を拡散させた。そしてその壁を圧縮すると、ツキカゲに向かって発射する。

波動を喰らい、吹っ飛んだツキカゲは、玄関の戸に激突し、戸を突き破った。

「ひいっ！」

戸の影に隠れていた左門と半治は間一髪で、飛んできたツキカゲを避けた。

玄関に転がったツキカゲは、一瞬2人を見たが、すぐに道場内へ走りこんで行った。

すると、梁の折れた所から屋根が崩落し、夜空が顔をのぞかせてた。

道場内に、物凄い量の埃が舞った。

「捨松、アイツらに見られちまったぞ！」

「仕方ねえよ、それよりも隙が見つかったぜ！」

ツキカゲは、月光丸を天井の穴に向かって掲げた。

空を覆っていた雲が晴れ、満月が姿を現している。

埃が収まり、禍鬼の目に入ったのは、青白く光る月光丸を振りかざしたツキカゲの姿だった。

「囚人番号0976345、グラリス星人・禍鬼。念力と重力操作能力を濫用しての、他星系における高次知的生命体の財産破壊と殺害の容疑、及び護送船内における反乱・脱走の罪により、銀河を貫く法理に従い、貴様を処刑する！」

「くたばりやがれーっ！」

禍鬼は再び半重力波動を放つ。

「反重力波！」

だがツキカゲも反重力波を放出して飛び上がった。

するとツキカゲの反重力波が禍鬼の半重力波の上で反発し、まるでトランポリンのようにツキカゲの身体を宙に押し上げた。

禍鬼は驚いて上を見上げる。ここに隙が生まれた。

「月光・満月斬り！」

落下しながら、ツキカゲは禍鬼を唐竹割りに斬る。

「三吉い、仇は取ったぜ……」

ツキカゲがボソリと言うと、禍鬼が光の輪に包まれて大爆発を起こし、祭壇もろとも木っ端微塵に消し飛んだ。

「そういうことか。下手人はあの化け物、あいつが幻斎の影に隠れて糸を引いてやがったんだ。そして化け物をやっつけてたのは、やっぱりツキカゲ……」

左門たちは戸の影から出るとツキカゲに歩み寄った。

「おめえさん、一体何者なんだい？」

半治がそういうと、ツキカゲは二人に向かって左手の拳を突き出した。

すると、左手から反重力波動が放たれ、二人を吹き飛ばす。

「ぶぎゃあ……！」

2人は壁に叩きつけられると、そのまま伸びてしまった。

「どうか今晚のことは、お忘れになっておくなせえ……」

ツキカゲと分離した捨松は、2人を見下ろして申し訳なさそうに

言った。

そして、そのまま奥の方へと消えた。

(10)

「半年程前、禍鬼に出会ってから私に神通力が宿るようになったのです。そしたらたちまち人が集まり、私は教祖となった。しかし、あれは私の力ではなかったのですね。全く、今頃それに気づかされるなんて・・・」

そう言うつと幻斎は、力なく笑った。

町の代官所に引つ立てられた幻斎達は、全てを白状していた。

だが、あまりに荒唐無稽なその内容に、代官所の役人達はあきれ返るしかない。

ただ一人、左門だけが真面目に聞いていたのだった。

「・・・町の人々の心を惑わし、金品を奪い取り、あまつさえ三吉を殺めたその方らの罪、許しがたし。幻斎一味に江戸送りを申し付ける。後日、評定所のお裁きを受けい！伊出羅教は本日をもって解散！」

左門が幻斎達に言い放ち、これで一件落着となった。

伊出羅教の御布施は、全て伊勢崎藩の奉行所が押収することになった。だが、ここで問題が起こった。

幹部達の証言よりも、実際に道場に残っていた千両箱が一箱少なかったのだ。しかし、結局千両箱は見つからず、うやむやのうちに処理された。

伊勢崎藩としても、これ以上この奇怪な事件でゴタゴタを起こしたくなかったのだ。

幻斎一味の江戸送りを見送った後、左門と半治は町を後にした。

「しかし旦那、なんだってツキカゲは俺らにあんなことをしたん

でしょうね？」

「わからん。だが少なくとも敵ではなさそうだぜ・・・痛てて！」

痛む身体をさすりながら、2人は街道を歩いていくのだった。

その頃、川原に建つ清兵衛親子の小屋では、清兵衛が放心状態で黙り込んでいた。

そんな父の姿を見つめながら、ミツはどこかほっとした様子だった。

とその時、入り口の近くで物音がした。

ミツは表に出てみたが人の姿はなく、足元に千両箱が一つ落ちていた。

「え・・・？何で・・・ウソ！？お金が戻ってきた！？」

清兵衛もそれに気づいて表に出てきた。

「こ・・・これは、神様の思し召しか？」

清兵衛は驚いて、その場に座り込んだ。

ミツは辺りを見回し、土手の上上がった。

土手の上を歩く渡世人の後ろ姿が見えた。その姿には見覚えがある。他に人はいない。ミツは確信した。そして呼び掛けた。

「捨松さーん！」

ミツは呼び掛けに、捨松は足を止めた。

だが、振り返ることなくまた歩き出した。

ミツは追いかけてようとも思ったが、諦めた。

捨松の後ろ姿が、全てを語っているように感じられたのだ。

ミツはただ黙って捨松を見送った。その姿が見えなくなるまで・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4455e/>

無頼装甲ツキカゲ

2010年10月9日01時19分発行